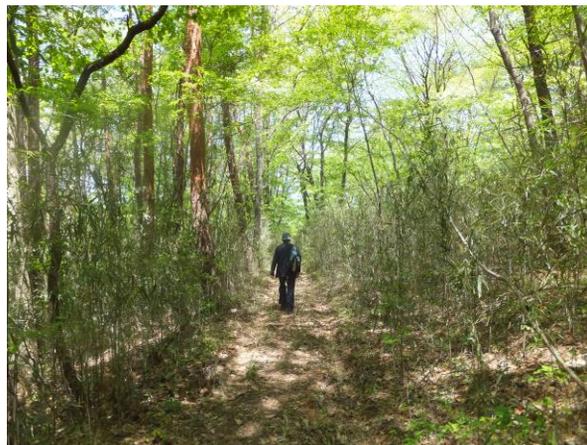


福島大学貴重資料集 第4号

Fukushima University, Material Report, no. 4, August 31, 2015



目次

猪苗代湖ボーリングコア試料(INW2012-1, 2) (2)

陸奥国伊達郡伏黒村・富田忠左衛門家文書 (3)

「松川の塔」碑文草稿 (4)

経済学部森合校舎ジオラマ (5)

福島県産マルコガタノゲンゴロウ標本 (6)

櫻井信夫福島県相双地域植物標本コレクション (7)

福島大学周辺の古道 (8)



猪苗代湖ボーリングコア試料(INW2012)

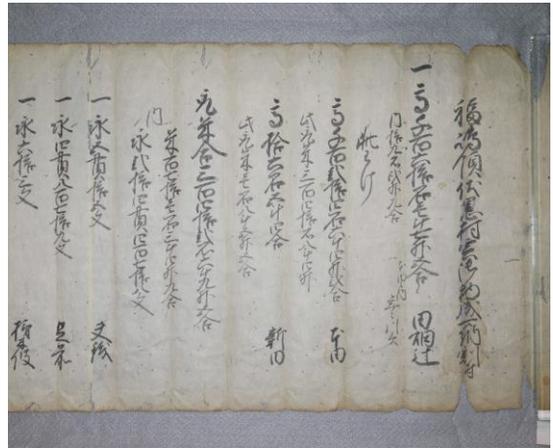
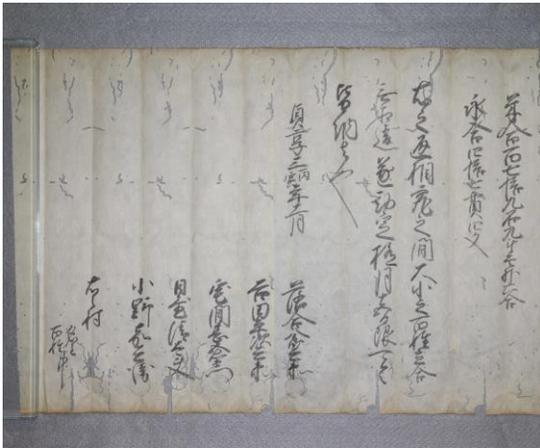
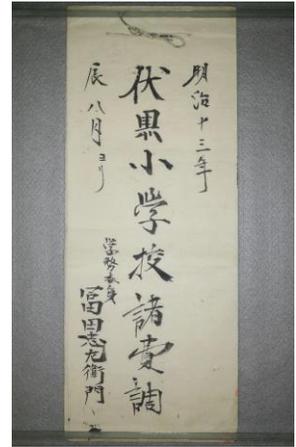
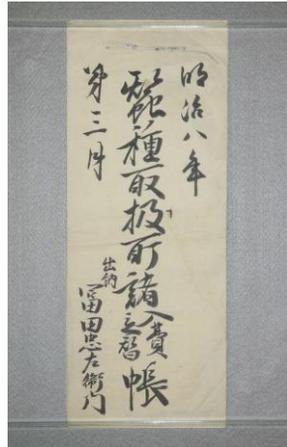
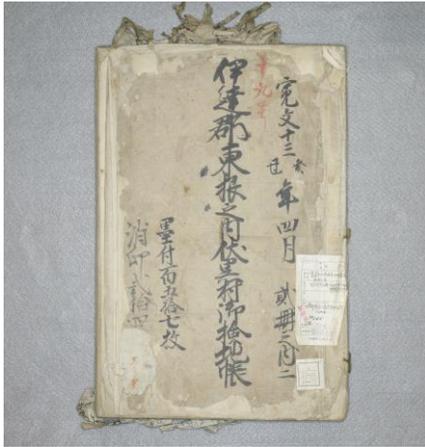
2012年9月6日～11月8日に掘削されたボーリングコア試料78本である。猪苗代湖湖心部の水深約90mの地点において掘削されたもので、掘削長は約28mであった。試料は、1本の長さが1mのステンレス製のサンプラーから押し出し、半割して断面の岩相記載と分析用試料の採取を行った後、残りの約半分が抜気した状態で保存されている。猪苗代湖の成立から現在まで、約4万2千年間の環境変化の情報を記録した堆積物試料である。

資料点数 78点

保管場所 共生システム理工学研究科 (プロジェクト室 506)

参考文献 廣瀬孝太郎・長橋良隆・中澤なおみ (2014) 福島県猪苗代湖の湖底堆積物コア (INW2012) の岩相層序と年代. 第四紀研究, 日本第四紀学会, 53(3):157-173.

執筆・*廣瀬 孝太郎(共生システム理工学研究科)
*現所属: 神戸大学自然科学系先端融合研究環
内海域環境教育研究センター



陸奥国伊達郡伏黒村・富田忠左衛門家文書

富田忠左衛門家は、陸奥国伊達郡伏黒村（現・福島県伊達市伏黒）の豪農である。伊達郡伏黒村は、1950年代半ばに、日本有数の養蚕地帯における地主制研究の好適地として着目され、調査が行われた。調査の成果は、高橋幸八郎・古島敏雄編『養蚕業の発達と地主制』（御茶の水書房、1958年）として刊行されており、同書において富田家文書が利用されている。

同書によれば、富田家は名主役を4度にわたって10数年間つとめた。1800年頃までには、蚕種生産で経営規模を拡大し、村内有数の地主へと成長していった。この傾向は明治以降も続き、松方デフレを経て、その経営規模はさらに大きくなっていく。

近年では、伊達町（2006年に周辺4町と合併。現・伊達市）によって『伊達町史』の編纂が行われ、1985年から2001年にかけて7巻（全8冊）が刊行された。近世史・近代史の資料編である第5巻・第6巻に富田家文書の一部が翻刻・掲載されるなど、自治体史編纂においても活用されている。

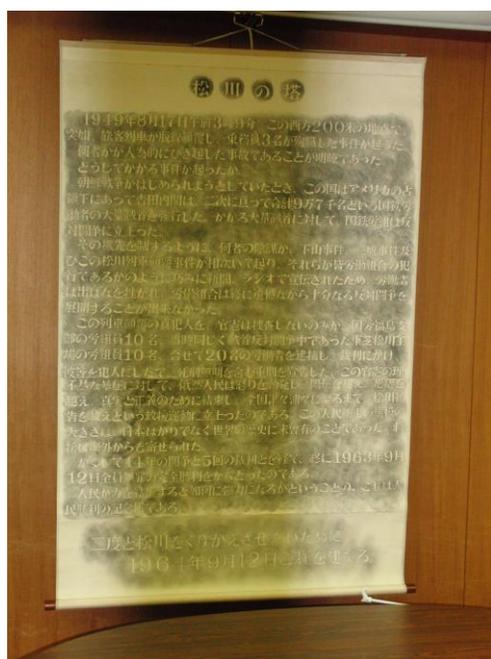
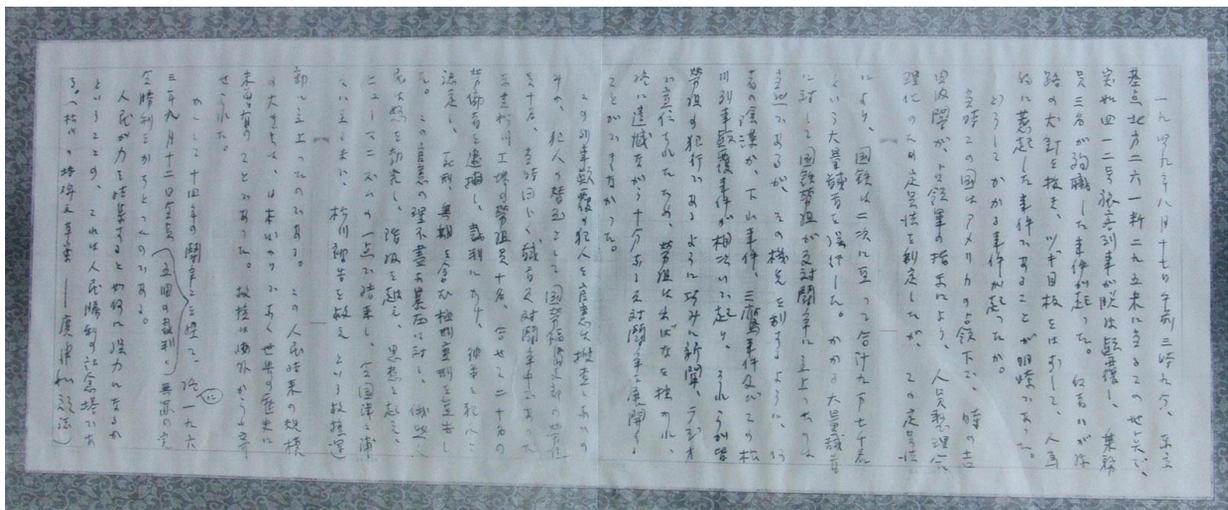
掲載した史料のうち、左上は寛文13（1673）年の伏黒村の検地帳である。右上の2冊は明治期のもので、「蠶種取扱所諸入費・立替帳」、「伏黒小学校諸費調」である。下段は貞享3（1686）年の年貢割付状（部分）である。

なお『東北経済』22・23合併号（福島大学東北経済研究所、1957年）は富田家文書の特集号である（小松賢司氏のご教示による）。あわせて参照されたい。

資料点数 段ボール箱16箱

保管場所 経済経営学類 文書庫

執筆・写真: 徳竹 剛(行政政策学類)



「松川の塔」碑文草稿

1949年8月17日、福島市郊外の東北本線で発生した松川事件（列車転覆・乗務員致死事件）は、14年におよぶ長期裁判の末、1963年9月12日の再上告審判決によって全員無罪が確定した。これを記念して、翌年9月12日、事件現場を見下ろす丘の上に「松川の塔」（写真右下）が建てられた。写真上は、作家・広津和郎が起草した碑文の直筆原稿であり、事件の背景や判決の意義が簡潔に記されている。

その後、1988年10月に福島大学松川資料室が開設されたこととも相俟って、毎年多くの人びとが「松川の塔」を訪れている。なお、松川資料室では、この碑文原稿のほか、碑文の拓本（実物大、写真左下）、塔のミニチュアなど、約10万点の資料（さらに超一級の大量の資料を受け入れ中）を所蔵・展示し、すでに7300点以上の項目をデータベース化している。

資料点数 1点
 保管場所 松川資料室（附属図書館地階）

執筆：伊部正之（松川資料室） 写真：金谷光泰（研究振興課）



経済学部森合校舎ジオラマ

昭和56年10月1日信陵同窓会より寄贈されたものである。植野石膏模型製作所の作で、「旧福島高等商業学校の設計書」を基としながらも、戦後森合校舎に増築された建造物も加え作成されている。

資料点数 1点
保管場所 経済経営学類棟情報視聴覚室

執筆・写真:小沼康治(経済経営学類支援室)



福島県産マルコガタノゲンゴロウ標本

福島県内産マルコガタノゲンゴロウの標本。マルコガタノゲンゴロウ（体長約24mm）は全国的に生息地及び個体数が激減している希少種で、種の保存法（絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律）の国内希少野生動植物種に指定されている（昆虫類の指定種は31種類）。環境省の第4次レッドリストでも絶滅危惧IA類に位置づけられており、各地で保護活動も行われている。福島県では2010年に初めて分布が確認された。現在、環境省からの許可を受け、県内3ヶ所で系統保存のための飼育が行われている（福島大学もその中の1ヶ所）。

資料点数 3点(2♀1♂)

保管場所 共生システム理工学類塘忠顕研究室(共生システム理工学類棟 605室)

参考文献 吉井重幸・三田村敏正・平澤 桂・高橋真希・高橋明子(2011)福島県初記録のゲンゴロウ類2種, ふくしまの虫, (29): 25-26.

執筆・写真: 塘 忠顕(共生システム理工学類)



櫻井信夫福島県相双地域植物標本コレクション

警戒区域内（20 km圏内）にある櫻井信夫氏の自宅に保管されていたものを、ご自身や協力者、および共生システム理工学類内に設けられたふくしま被災地自然史資料保存対策室により震災後にレスキューされた。『浪江町史』などの執筆に用いられた標本を含んでいる。福島第一原子力発電所付近や、放射線量の高く現在立ち入りが制限されている地域の植物を多く含む、唯一のまとまった植物標本コレクションと考えられている。

資料点数 約1万点

保管場所 共生システム理工学類生物標本室（共生システム理工学類棟 712室）

参考文献 櫻井信夫(2003)植物. 浪江町史編纂委員会(編), 浪江町史別巻I浪江町の自然, pp. 26-85. 福島県浪江町, 浪江.

櫻井信夫(2003)浪江町植物目録. 浪江町史編纂委員会(編), 浪江町史別巻I資料編, pp. 4-40. 福島県浪江町, 浪江.

執筆・写真: 黒沢高秀(共生システム理工学類)



本誌第2号でも紹介された、総合図書館前の「はっつけ地蔵」の右手に「金谷川の由来」と題する案内板があり、金谷川地区の小字図が記載されている。経済経営学類所蔵による大学建設以前の金谷川地区の地形図および立体模型の資料と併せ検討すると、金谷川キャンパス構内にはかつてほぼ中央を北西方向に突き抜けるように旧道が通っており、それが旧浅川村の小字などの境界となっていたことがわかる。

この旧道は、構内で往時の姿を確認するのは難しいものの、うつくしまふくしま未来支援センター横の駐車場脇の小高い平場付近から先に続く道がそれにあたるとみられる。旧道は途中で左からの上り道と合流し(後述)、やがて農道から左手に分かれ、鬱蒼とした木立の中を分け入って山道となる。多くの人々が長らく利用しつづけたであろう旧道の跡は今でもしっかり残っている。春先になるとポ

ランティア有志が周辺の草刈りをしてくださるそうで、初めてでも道なりに歩けば迷うことはあるまい。

この旧道を大学構内から歩きはじめて小一時間もすると、東北新幹線のトンネルの出口付近に到達する。このあたりには「石那坂」という地名が伝わる。鎌倉幕府の歴史書である『吾妻鏡』文治5年8月8日条には、奥州藤原氏を攻撃すべく出陣した源頼朝軍を迎え撃つため、藤原泰衡郎従の信夫庄司佐藤基治(源義経の家臣で有名な忠信・継信兄弟の父)が「石那坂」に陣を構えたが、常陸入道念西(伊達氏の祖とされる)の4人の子たちによって討ち取られたという記述があり、奥州合戦の古戦場の一つと目されている。

本学教育学部の名誉教授である小林清治氏は、「石那坂」の地名を手がかりに、先の旧道を中世の奥州道(当時は奥大道といった)の一部であると比定し、奥大道は「松川から関谷(本来は「関屋」)を経て福島大学キャンパス西辺から山道に入り、峰伝いに進んでから平地に下り、新幹線および在来線下り線にほぼ沿って北に進んだと説明された¹⁾。小林氏が執筆者となり、福島県内の中学校の副教材として利用されている『ふくしまの歴史2 中世』(書店で購入可)でも、「福島大学北西の裏手から石那坂までの約一・五キロメートルの区間には、幅五メートル余りの道が続き、両側には溝の跡もみられます。東山道・奥大道の跡と推測されます。源義経や頼朝、あるいは西行・一遍など奥州に下った多くの人々が、この道を通ったのです。」と記述されている。

奥大道自体は金谷川キャンパス内を通ることなく、キャンパス手前で平地を西方向に下り、金谷川駅方面へと続いていたものと理解されている(先の「左から合流する上り道」がそれにあたる)。かつて金谷川キャンパス内を縦断していた旧道は、奥大道から分かれた支道ということになるのか。古代・中世段階から古道として同様に存在しつづけたかどうかは未考で、近世以降にできた旧道なのかもしれない。

「石那坂」の地名の存在を根拠に、福島大学北西の裏手から峰伝いに続く古道を「奥大道」と比定する小林氏の見解は、国見町の歴史・地理の郷土史家菊池利雄氏²⁾、福島市の古道研究の郷土史家江代正一氏³⁾などによって研究が深められているが、一方で奥大道と近世の奥州道中は重複し、現在の福島市清水町に「石那坂」を比定する考古学研究者の本木元治氏の説⁴⁾も提起されている。

古道研究は一般に、歴史学による史料の解釈、歴史地理学の地図・航空写真等による痕跡の観察や地名研究、考古学の発掘、民俗学の伝承からの追究など、学際的手法によって進められる。史料が限られている現状では、いずれの説も決定打とはなりにくい。その場合、考古学による発掘調査が有効ではあるが、それは任意でどこでもできるわけではない。また、発掘自体が「史跡の破壊」につながる面があることも否定できない。ここは既存の資料をもとに学術研究を深めつつ、「源義経や頼朝、西行や一遍も同じ道を通ったのかもしれない」という往時の光景、“遙かなる中世”に思いを馳せながら散策を楽しむのが最適ではないだろうか。

本誌がこれまで取り上げてきた「貴重資料」とはややイメージ的にかけ離れているかもしれないが、福島大学の所在地とその付近にまつわる歴史的な地名、旧道などの史跡も、本学にとっては大切な「貴重資料」の一つである。これからも市民、そして大学関係者の憩いの道として愛されつづけることを願うばかりである。

- 1) 小林清治「石那坂合戦の時と所」(『すぎのめ』24、2001年)
- 2) 菊池利雄「石那坂合戦」(『福島県の合戦』、いき出版、2010年)
- 3) 江代正一「ふれあい講座 古代道」レジュメ(2012年)。なお、江代氏の著作が歴史春秋社より近刊のことである(難波謙二氏からの情報による)。
- 4) 本木元治「最近の調査成果から見た阿津賀志山と石那坂の合戦」(『福島考古』第53号、2012年)

福島大学貴重資料集 第4号
Fukushima University, Material Report, no. 4

発行日:2015(平成27)年8月31日

編集・発行:福島大学資料研究所・福島大学貴重資料調査検討会
住所:福島県福島市金谷川1 福島大学共生システム理工学類内
郵便番号:960-1296 電話:024-548-8201
E-mail:kurosawa@sss.fukushima-u.ac.jp

福島大学資料研究所

黒沢高秀(代表), 阿部浩一, 笠井博則
鍵和田賢, 菊地芳朗, 澁澤尚, 塘忠顕
徳竹剛, 難波謙二
福島大学貴重資料調査検討会
上記の他, 岡田努, 小沼康治

保存すべき貴重資料をご存知な方は、お近くの検討会メンバーにご連絡下さい。